

## 論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: Complications and adverse outcomes in pregnancy and childbirth among women who conceived by assisted reproductive technologies: A nationwide birth cohort study of Japan environment and children's study

和文タイトル: 生殖補助医療による妊娠および分娩の合併症と転帰

ユニットセンター(UC)等名: メディカルサポートセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BMC Pregnancy and Childbirth

年: 2019 月: 巻: 頁:

筆頭著者名: 永田知映

所属UC名: メディカルサポートセンター

目的: 体外受精胚移植・顕微授精による妊娠における母児の周産期転帰を、自然妊娠における母児の周産期転帰と比較すること。

方法: 出産時全固定データを使用し、妊娠方法ごとに周産期合併症および不良な転帰の頻度を示し、自然妊娠をreferenceとして、体外受精胚移植・顕微授精による妊娠における周産期合併症および不良な転帰に関するリスクを検討した。母体に関する解析はロジスティック回帰モデルを用い、胎児および新生児に関する解析はgeneralized estimating equations(GEE)を用いた。

結果: 体外受精胚移植による妊娠では自然妊娠に比較して前置胎盤、癒着胎盤、妊娠高血圧症候群のリスクが高く、顕微授精ではこれらに加えて常位胎盤早期剥離のリスクが高かった。また、顕微授精・体外受精胚移植を用いて妊娠した母体では、輸血やICU入室を要するリスクが高く、児については早産のリスクが高かった。

考察:(研究の限界を含める)

体外受精胚移植・顕微授精による妊娠における周産期合併症および不良な転帰については、これまでの報告と同様の結果が得られた。JECSは対象地域の全ての妊婦をカバーあるいは完全なランダムサンプリングを用いているわけではないため、selection biasが生じている可能性がある。生殖補助医療の使用については自記式調査の回答を用いており、生殖補助医療の詳細な方法については解析を行っていない。診断や治療は各施設において行われているため、施設によってその適応基準に差異がある可能性がある。

結論: 生殖補助医療を用いた妊娠では周産期合併症のリスクが高く、高度な医療を要する可能性があるため、産科医はこの点を認識すべきである。